書評

大津雄一著『軍記と王権のイデオロギー』

山下宏明

今は亡き梶原正昭が、生前、最終講義で、「これまでの軍記研究は……哲学が欠けていたのではないか」と語ったと言う。大津は、この梶原の日頃の思いを体していたのであろう、批評のための理論、古くはアリストテレスや孟子に始まり、ヘーゲル、ロラン・バルトはもちろんのこと、ユーリー・ロトマン、ルイ・アルチュセール、アーサー・ダント、ヘイドン・ホワイトらのほか、柄谷行人まで、いずれも平易とは言えない数多くの理論を体系的に学んだようである。一九四〇年代の武士論を受け、当時の〈科学性〉を志した永積安明ら歴史社会学派が、天皇王権の解析を怠ったとし、軍記とは「権力をめぐる武力闘争を記した共同体の歴史叙述」だと言う。書き下ろしの「序論」と、早く一九九六年に書いていた「総論」に、その主張を集約している。物語＝歴史が共同体のイデオロギー装置であることをロトマンの内外対立モデル論を基軸に論じる。九世紀、新羅・中国との緊張の中で、王の神秘的な聖性を強く意識して、権力システムを確立する。軍記というテクストは、そのシステムである天皇王権の危機と、それからの回復を語る、王土共同体の歴史＝物語であることを批判しなければならない。そのために、〈王権への反逆者の物語〉としてのテクストが生産された歴史的・社会的状況、それと知らずに依存している共同体イデオロギーの観念的、思想的な前提を明らかにすることが不可欠な作業である。共同体は天皇王権の至高性を規範とし、超越者の加護を得て、これを妨げる将門を〈異者〉として排除して秩序を回復する。皇統につながる将門を悲劇の英雄として、テクストの受容者は、その反逆に快楽を感じることで、秩序からの抑圧感を〈減圧〉する。テクストは王権共同体の世界の了解方法、共同体の完全性を〈教育〉し、その制度性を受容者の目から〈隠蔽〉する。このような軍記の戦略を知り、それを生産的に活用するのが批評の責務であると言う。『陸奥話記』は、安倍頼良・貞任という〈周縁〉からの、王権への反逆と、その討伐を描くが、貞任らは俘囚に過ぎず、王権を脅かす資格を欠く。その〈化外〉の民を王権に従わせる征夷の物語であって、受容者に〈権力と戦う快楽〉を与える〈悲劇の英雄〉を欠き、〈減圧〉も働かない。しかし（反面教師のように？）軍記としての〈教育〉の機能を露呈している。『陸奥話記』というテクストを持ちえたことは、断じて皮肉めいた言い回しなどではなく、我々にとっての慶事である」（134p）と言う。みずから破滅することのない王土の共同体は、超越者の意志を捏造してでも危機を装う。崇徳院や頼長、特に為朝という〈異者〉を迎え入れて〈権力と戦う快楽〉を読む者に堪能させ、これを断罪して共同体の活性化を図るのが『保元物語』である。ただ、金刀本での崇徳院は〈皇を取て民となし、民を皇となさん〉と発言して、瞬間的に皇統の外からの王の誕生を幻視し、〈王権への反逆者の物語〉に亀裂を入

れたと言う。『平治物語』では、後白河院の寵愛を利用し、信西を排除しようとする信頼に王権を侵害する意志はなく、王の危機感がない。〈源氏再生〉の後補による物語の揺れをも見せ、事件の〈翻訳〉に失敗したテクストである。超越者に支えられた『平家物語』の頼朝は、院の要請を受け、〈忠臣〉として朝敵平家を排除する。反逆者の清盛は、王権の中心を無化することなく混沌を持ち込み、排除されることによって共同体の活性化を進める。ライバルの頼朝を意識して挙兵する義仲は、王権に対して無知、鈍感で、辺境の野蛮な異人として排除され、受容者に緊張を与える中で共同体の活性化に貢献した。その義仲が兼平と一所の死を望む愛の物語は、自分よりも有能だと思う相手にすり寄り、相手と融合して安心する自己犠牲的な愛の尊さを〈教育〉する。清盛は、白河の子どもとして、「共同体の中心にあるようにみえながら、共同体の上方に逸脱し、そこから共同体を吊り下げている」(210p)。平家一門の滅亡に後悔する後白河は、女院に一門の滅亡を饒舌に語らせることによって亡魂を慰撫する。受容者は、その物語に涙する院を読むことにより、王権への不満不快感を〈減圧〉解消し、権力を肯定、王権の浄化・称揚を果たすと言う。この間、テクスト自体の揺れによるものか、わたくしには他者・異者・周縁・外部などの用語の使い分け、識別が時に困難になることがあった。王が臣に敗れるという異様な乱について慈光寺本『承久記』では、鎌倉方の市川新五郎が、王の血は多くの人間に流れていると叫び、北条義時もおのれの果報が十善の王、後鳥羽よりも勝っていると言う。しかし王権はそれほど甘くもない、すなわち流布本になると、義時が忠臣であると自認、王権の枠組みを守り、後鳥羽は悪王であったがゆえに敗北したのだとする。慈光寺本は、因果の論の下にはすべてが平等であるとする仏教の四劫観により王権の絶対性に亀裂を入れたが、王権を危機に追い込む〈異端〉を描く凡庸な二流の歴史になってしまった。ただ、それを相対化しうるきっかけは与えたとする。始まり・中間・終わりという均整、その秩序とリズムが、国家の正当な法を教えることで、われわれを慰撫するのが軍記であるのだが、テクストの不覚からそうした、完結した構成を欠く、質の悪さを露呈するのが『太平記』である。王権(後醍醐)の至高性を脅かす北条を異者として排除する正成の行動が、われわれに快楽を与え、国家の法を〈教育〉する。それが第二部では、後醍醐自身が、超越者の意志を欠く〈異者性〉として排除され、王権を畏怖する尊氏が勝利する。しかしその尊氏が、後醍醐を〈欺くに安かりけれ〉として、野心を達成するために装っていたことを明かし、受容者をいらだたせる。足利政権の内紛を描く第三部では、〈王権への反逆者の物語〉が機能の場を失い、〈歴史〉の欺瞞性をラディカルに語りながら、より開かれた自由な公共空間を求め続ける場を提供してくれる。ひとしく足利幕府寄りの『明徳記』『応永記』『応仁記』。その義満の恩に反逆し、滅びを自覚しながら、天皇王権の下で〈忠臣〉であることを意識して国務を争う足利と山名・大内らとの争いに、われわれは期待できない。特に『応仁記』は中国の宝誌という預言者に仮託された〈黙示録〉としての『野馬台詩』に則り、王法も仏法も破壊しつくすことを確認する。世界の

終わりから現在と未来を生きようとする黙示録的な終末観を以て、未来の革新を希望し、救済を願う。しかし足利・天皇王権ともに機能を喪失した時代の軍記に、現実を物語にする能力はないとする。論としての一貫性を考えれば、ここで軍記の終焉を言ってしめくくるべきであったかも知れない。しかし、大津の軍記論を明快に展開するのが、第十章の『曾我物語』論である。ヴォルフガング・イーザーらの読書論に学びつつ『曾我』を考えるのが大津の始発であったか。天皇王権の〈正統な〉護持者であり代行者である頼朝が支える共同体を危機に陥れる兄弟を排除して、危機から脱出することを描く。体制に対して鬱積する受容者は、秩序から排除される異者としての兄弟の仇討ち成就に同化して快楽し、秩序への恨みを〈減圧〉する。しかも、秩序は更新を果たし、〈公〉と〈私〉の対立を解消する。兄弟を共同体内の聖なる異者として、その〈孝〉を〈忠〉に取り入れ、家族的秩序の維持を国家的秩序の確保のために利用するのだとし、図式化は明快である。あえて本書に再録した所以であろうか。大津の軌跡の中、本書におさめる、もっとも早い論文は、一九八九年の慈光寺本『承久記』の特質――その構想を中心として――」『古典遺産』27を執筆していた。当時から大津は「後鳥羽院個人」と「古代勢力の象徴として（の）国王」とを区別し、市川新五郎の発言が「読者にある種の感動すら与える」と言っているところに、今日の軍記機能論の芽生えを見せているのだが、なお「作者」論の色が濃い。今回、わたくし自身の反省を述べるならば、その怨霊論について、「減圧」機能の対象、減圧される主体を怨霊を言うものと読んだのだった。しかし実は、大津の意図はそうではない。死者のためではなく、生者のための軍記であるテクストを読む受容者が主体であり、それを読む〈快楽〉、その快楽により〈教育〉され、しかもその仕掛けを〈隠蔽〉されていることを見抜くイデオロギーの必要を主張するものであった。その意味で民俗学的な成立論とは異なる。今後、これに編著者や伝承者を考慮することがどのように論を豊かにしてゆくのかが楽しみである。文学批評は、時代の動きと無縁ではありえない。大津が批評の出発点とした歴史社会学派は、一九四〇年代以後の思想史的状況において論をなした。その後、歴史学界の権門体制論、抑圧の体系と見なした秩序自体の考察の中での「公共」論が、今回、大津の論を進めたのであろう。これまでの諸氏の王権論が、王権を主題と見ているのかどうかに、わたくしは迷って来たのだが、大津の主張によれば、王権という枠組みをどうとらえるかというイデオロギー論である。「権力をめぐる武力闘争を記した共同体の歴史叙述」である軍記テクストの権力構造をあぶり出すことにあったのだろう。多くの軍記の凡庸さを指摘し、むしろ軍記としての亀裂や破綻に軍記としての可能性を探り出そうとするものであろうか。「王土の共同体を吊り下げている」（232p など）には、何か含意があるのか。その奥にある大津の思いはいかなるものなのか、今後のテクストの読みが答えてくれるであろう。ロトマンの内外モデル論を軸に、軍記テクストの三つの機能を論じる。その結果、記号・構造論を押し出すことになるのだが、内と外との別が明快に過ぎる。内外

を区別する軸に揺れはないのだろうか。構造把握を「翻訳法さえ見出せば、建武の内乱の物語化も容易である」(35b)と言ったのでは、どうしても図式的になりがちである。大津のイデオロギー論に学ぶとしても、受容者であるわれわれがテクストの読みから得る〈快楽〉は多様であり、その〈減圧〉のされ方も多様であろう。そこに物語テクストの読みが課題となるはず。大津が批判するヘーゲルを越えるためにも、たとえば今井兼平の義仲との融合的な愛、北野通夜物語の三人の語りの構成法と、その内容、特に因果論の理解、『藤戸』など能の修羅にも通底する琵琶法師の介入参加の意味などをも考えてほしい。「断じて……でない」「圧倒的に」など、次のステップへの大津自身の力みを見せるのか。書評を行うことによって、学ぶところの多い、軍記研究の哲学を厳しく問う力作である。

(二〇〇五年三月　翰林書房　A5判　四一〇頁　税込八四〇〇円)

新刊紹介

深澤邦弘著

『平家物語における「生」』

不思議な本である。表現や作品の構造を分析する客観的な視点と手法によって、平家の登場人物たちが生き生きと立ち上がってくる。教科書を一通り読んだだけでは見逃してしまうような、登場人物の細かい心の動きが、今に生きる我々の問題として胸に迫ってくるのである。例えば勇猛で豪快な人物として単純化されてしまいがちな能登守教経を「いうべきことを胸底に懐きながらその機会を永久に失った人」とし、教経の最期に合戦の意味を問う姿を読み取る著者の目には並々ならぬものがある。第一章で取り上げられた一三の章段を読み進むと、著者の「生きること」に対する誠実さ、その上に培われた確かな洞察力を感じる。

また、第一章に付随する「『平家物語』紀行」は、現在と中世とを往還するような、味わい深い小品である。第二章の教材研究にも、著者の真摯な人柄がにじみ出ている。

(二〇〇五年八月　新典社　A5判　二八八頁　税込七八七五円)　〔渡瀬淳子〕